

ぼくと彼とキミの
相変わらずな関係性についての
いくつかのはなし

「どうしたの？」

僕の声に御剣が、せつなそうな丸い目で、上目使いに見上げてくる。

原因はわかっている。さっきの食事に混ぜた薬味がわからないよう、顆粒状になったそれを、御剣は気がつかずに食べてしまったからだ。

ほら、もう効きはじめている。

御剣は、潤んだ目を隠そうともしなくなった。

揺れる瞳が、せつなそうに僕を見て、そしてすぐに反らされる。そしてまた僕を見る。今度は視線を外さない。珍しいことだけれど、御剣はよくそうやって僕を見る。

「大丈夫……？」

普段なら、寄せた指にもっと硬い反応を返すはずの御剣の体は、柔らかく、ぐんなりとなって、簡単に僕の指を受け止める。どこを触っても力が入っていない。こんなことは滅多にない。

いつもは妙に他人行儀で、触ってほしいとねだ

るくせに、どこか力が抜けていない風なのに。

触れてほしいのにすぐに嫌がって、身をよじって逃げるのにも、だいぶ慣れた。

僕は促されるままに御剣の体を撫でる。そうすると、御剣は耐え切れないうような高い声を上げた。断続的にかすれる声は、滅多に聞けない悩ましい声で、それを聞いているだけで僕はじわっと熱が上がってくるのが止められない。

どうしよう、なんてかわいいんだろう。

指先がじんじんとしびれているようで、うまく握りしめることができない。

「どうしたの、侍。……もう、こんなにしてる」

耳に入るように、ゆっくりと名前を呼ぶ。

こういうときに名前を呼ぶと、普段呼ぶときにもおもしろいくらいに反応してくるようになるのだ。もっと君の名前を僕は呼びたい、だってとても綺麗な名前だと——そう思わない？

僕は、指の先で御剣のうなじをゆっくりとねでおろした。そうすれば、それだけで耐え切れない

ように御剣は体をよじって、甘い声で鳴き始める。

確実に官能を刺激する声。

感じているのだ、確かに。

それは僕にもよくわかる。御剣は普段あまり汗をかかない。なのに今は、零れる吐息もどこか熱く、濡れていて、鼻の頭がしつとりと濡れているのが、僕にもよく見える。

「あ、：ああア、っア——んッ」

「いい声だね」

僕は素晴らしいながら、すでに自分の力では閉じることが出来なくなっている御剣の下肢を、そつと割った。

普段なら、もっと抵抗して、滅多に自分から足など開くことはない。なのに今日は、さっきの薬のせいなのか、力の入らない足が、自然に外側に開いてゆくのだ。

脱力した腰のラインは本当に色っぽく、悩ましく、僕はそれを見ていると、どこか後ろめたい、禁忌を犯しているような気分になってしまう。

本当はそんなことはないのだ。これは御剣のためなんだ——いや、本当は僕のためなのかもしれない。こうやって、あの薬を盛ったときの君は、本当に——そう、本当に色っぽくて、どこのグラビアアイドルだって、銀幕の女優だって叶わない。セクシーで純真で、キュートで素直で——僕の思うがまま、せつない声を上げて身をよじる。

普段はあまり眼にしない腹をそつと探ると、それだけでびくり、びくりと御剣の指先が震えるのが見えた。呼吸は荒く、断続的になってきていて、飲み込めない唾液が顎を伝っている。さっきから、ひっきりなしに唇をなめる舌の赤い色が、まるでその先を促しているようだ。もう、あえぐこともできないみたいで、甘い声で小さく呻くばかり。どうしよう、なんてカワイイんだろう。

こんな姿を僕に見せてくれるなんて、こんな無防備な格好で横たわって、僕に全てをゆだねてくれるなんて——ああ、どうしてくれよう。

僕は息が荒くなってくるのを止められない。

こんな姿を見せてくれるのは僕だけだと思おうと、それに一層興奮してくるのが止められないんだ。本当に——どうしよう？

「ここはどう？」

僕は足の間、隠されている大切なその部分をそつと探った。

すぐに、悲鳴のような声が上がリ、それはすぐに甘ったるい、刺激を求める声に変わった。

高い声。普段はこんな声を出しているところを聞いたことがないような、甘ったるい喘ぎ……セクシーで、ずんと僕の腰に響く声。

「御剣、…イイの？」

答えはない。ただ、ただ御剣の、甘く、苦しうな、切ない声が——声だけが、僕の耳をそつとかすめるだけだ。

感じているんだね、御剣。

さっきの薬は、よく効いただろう？

僕は指先で、隠されている御剣の陰部を探る。

先を摘んで、そつとゆすりあげると、刺激が強い

のか、びくん、と腰が跳ねた。

「ふ、ふあ…っ、……あ、あっ」

「こんなにして、……いがいとエッチなんだな、御剣って……」

僕の声にも、御剣は全然答えられないようだった。ただ、そつと目を閉じて、浅く呼吸をしながら、舌を出して喘いでいるだけだ。

時折体がびくり、びくりと震える。脱力した四肢は完全に弛緩していて、普段のびしつとした姿勢は嘘みたいだった。少し発熱してもいるようだ……しつとりと手のひらにすいつくような感触に、僕はぞくぞくする。

「気持ちイイの？ ……そんな御剣も、カワイイよ」

僕はそういうと、中から彼のモノを一気に引きずり出した。

途端、御剣は僕の手を払いのけようともがき始める。往生際が悪いな、こんなときになつて。

もう、全部、見えてるのに。赤く窄まった孔だつて、ひくついているのが見えるのに——。

「な——る——ほ——ど——
—お——お——お——お——お——お——
「…!」

ぱっかあ——ん!

間の抜けた高い破裂音と同時に、御剣の声が僕の頭上から降ってきた。

振り向けば、般若のようなものすごい形相をした御剣が、手に何かを持って突っ立っていた。

眉間にヒビが入ってるなんてもんじやない!

一見ブツ殺されるんじゃないかと思うような凄惨な形相なだけけど、困ったことに僕はそんな御剣も、やだなあカワイイなあとか思っちゃまうかなり重症な病人なのだった。

「痛いよ、御剣……」

「キサマ、さっきから何をしているのだ!!」

ああ、すごい声だよ御剣。今なら低周波でガラスにダメージが与えられるんじゃない?

床に座っている僕からは頭のとっぺんが見えな

「駄目だよ」

僕は陰部を指先で弄び始める。

ピンクの肌が充血していて真っ赤だ。

すごい、気持ちがいいのが辛いのか、ないている声もどんどんかすれてくる。

高い、せつない吐息に、僕は御剣をいじる指を早めた。

体を撫でさすっている刺激で、恥じらいは少し減ったのだろうか……少しずつ、呼吸が落ち着いてきたようだった……。

いのが残念だけど、後頭部のピョっとはねてる毛がきつと今、ビンビンに逆立っているんだろな、あ、きつと。でも手首が赤いよ？ まあ怒ってるとか力入れすぎたとか他にも要因はあるかもしれないけどね。

「…ん？ どうしたの、御剣」

「どうしたもこうしたもないだろう！ 黙って聞いていれば、貴様いったい何を……!!」

どうやら、さっきの見事な破裂音は、御剣が手にした雑誌を丸めて僕を殴った音だったみたいだ。音の割には痛くなかったのはそのせいか。

一応、御剣なりに手加減してくれたのかな？

それとももしかしてコブでも出来ていたりするのか。僕、そういうことに関しては馬鹿みたいに頑丈だから。それも僕を頑丈に産んで育ててくれた両親のおかげだなあ。こんなときに役に立つなんてありがたい。

「何って、……何だと思ってたの」

「……………!!」

今度こそ御剣は本気で怒った。

うわ、すごい。みるみる耳から首から真っ赤になるのが見える。

なんてカワイイんだ、御剣ったら！

「貴様——!!」

「ふにゃん」

怒り心頭に達した御剣が、僕を本気で殴ろうと手を上げようとした——そうしたら。

ものすごく場違いな声でした。

「あ」

「ん？」

その声に、御剣は一瞬気を削がれたみたいだった。ナイスタイミングだ！

さすが、空気読むのうまいなあおまえ。

御剣は驚いて声のするほうを見下ろした。なんだか間接が固まっているみたいで、ぎくしゃくした動きがロボットみたいになってる。

ぎぎぎ、と音がしそうな感じで、御剣は床に座り込んでいる僕と、その僕の手の下でぐったりと

たんじゃない？」

「はあ？」

御剣はさっぱりわけがわからないという顔をしている。僕はその間に、食事の準備をするべく、台所に移動した。御剣はやっぱりまだ怒った顔のまま、僕の後をついてきた。ええい、そんなところが妙にカワイイじゃないか！ どうしてくれる！

「粉……??？」

御剣は僕の言葉の意味がわからないらしい。

今度は怒っているのとは違う意味で、眉間に皺を寄せた。御剣は動物を飼ったことがないと聞いていたので、こういうことは初めてなんだろう。

「そ。またたびの粉だよ。『猫にまたたび』って言うでしょ？ あれ、普段の餌に少しだけ、ふりかけてかけてやると、猫にはかなりいいストレス解消になるんだよね。猫にもよるみたいだけど」

「…ストレス解消？」

「そ。怜侍には格別よく効くみたい。オスは効果出やすいってよく聞くけど」

横になっていて、さっきまで僕の指先で揉まれ、弄られて、限りなくセクシーなあんあん声で鳴いていた——少なくともさっきまではそうだった——猫が、いつのまにか立ち上がって、御剣の足にすりすりと体をこすりつけているのを見おろしていた。

「ふにゃ、ふにゃややお、お、おおん」

殴ろうとした手のやり場に困った御剣が、完全に固まってしまった。この間に僕は、すばやく立ち上がり、怒った表情をどうやっておさめたらいいのかわからない：ような顔をした御剣と、きちんと目を合わせた。そうしておいて、少しだけ口元をあげて、笑う。

「怜侍が餌がほしいって。牛乳かな？」

「……なっ、…成歩堂……!! さっき、この猫は、貴様が食事を与えたではないか……!!」

「ああ、——そうだったけ？ でも、またたびの粉振ったから、途中で食べるのやめちゃったんだよねえ。もうすっかり切れちゃったから、お腹すい